論　　文

英語科教職課程履修生による
発音練習への自主的な取り組みと課題

[1]今　井　由美子　　[2]大　塚　朝　美　　[3]若　本　夏　美

[1]同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・准教授
[2]大阪女学院短期大学・専任講師
[3]同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・教授

Developing Learners' Autonomy and Motivation through Pronunciation Practice in a Pre-service English Teacher Training Course

[1]Yumiko Imai　　[2]Tomomi Otsuka　　[3]Natsumi Wakamoto

[1]Department of English, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Associate professor
[2]Osaka Jogakuin Junior College, Lecturer
[3]Department of English, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

Abstract

The purpose of this research was to focus on how Japanese EFL learners develop autonomy in language learning. Forty-four female students in their junior year of college,- participated in the practice teaching (teaching practicum) programme at a local junior/senior high school. The student- teacher participants were offered two phases of pronunciation training, and each practice session was 30 mim, conducted daily for 10 days. Each- phase lasted 15 days. Practice materials were chosen from the ATR CALL BRIX 4.0 application (©2013 ATR Learning Technology Corporation). For the first phase of training, participants were instructed to concentrate on single English word pronunciation, and for the second, on full sentence pronunciation. Participants were also required to write comments after each practice session,- and to respond to questionnaires about the training, at the end of each phase. The results of the questionnaires showed that more than 70% of the participants positively evaluated their participation in the training.,- They also felt that the training improved their pronunciation skills. Moreover, about 80% became aware of personal pronunciation weaknesses,- through the training. Although about 70% of the participants felt that their autonomous learning skills had improved, 65% did not believe that they had gained any substantial confidence in pronunciation ability. In this study, the authors conclude that,- in order to promote the successful development of autonomous language learning, teachers need to prepare an environment where learners are able to,-: 1) choose personally useful and important tasks,-; 2) recognise and appreciate the significance of their decisions:,- 3) feel supported and encouraged by their teachers/evaluators,- regarding what they have achieved in their learning.

1. はじめに

英語科教職課程履修生にとって発音学習の重要性は高く、特に教育実習を翌年に控えた３年次では、学ぶべき最重要項目の一つである。本文の音読や新出単語の発音など、自らが学習者のモデルとなり発音することが求められるため、履修生の発音に対する関心や意欲は高いことが予想される。本研究では、自主的な発音練習の機会を与えられたことに対する教職課程履修生の態度を調査し、練習中に履修生自らが何に気づくのか、またこのような半自律的学習の問題点について考察する。

2. 研究の背景と研究の目的

英語教員を目指す教職課程における発音指導については、その導入がそれほど積極的でないことが指摘されており、全国239学部のシラバス調査ではわずか約25％の科目においてのみ発音に関する要素が取り扱われているにすぎない（河内山・有本・中西、2013）。一方、JACET教育問題研究会（2006）の調査によると、教育実習生を受け入れる現場の教員が実習生に求める英語力として「教科書などを適切な発音で読めること（適切発音）」が最も多い結果となり、英語科教員養成のカリキュラムや授業において今後発音指導をどのように取り入れていくかが課題となっている。

適切発音が実習生に求められていながら、実際の教職課程ではその時間が十分に確保されていないといういわばジレンマの状況下において、課外で発音練習をする機会を与えることで履修者がどのような取り組みをするのかに注目した。自律学習（Zimmerman & Schunk, 2009）はアクティブラーニングとともに近年日本の教育においても注目が集まり、様々な教育分野で実践されているが、履修者らは将来教師として自らの生徒たちに自律学習を促す立場となる。本研究は、そういった履修者たちが自らの学習をどのようにコントロールし、自主的な学習機会を与えられた際にどのような選択をし、どう行動するのかを探ることで、自主的な英語学習を促す鍵を見出すことを目的としている。

3. 調査方法

調査協力者は、教育実習を翌年に控えた３年生で、教職課程「英語科教科教育法Ａ・Ｂ」を受講した44名である。筆者らは発音トレーニングについて、発音向上のための自主的課題を検討し、７月末（第１期）および９月末（第２期）の各２週間の練習期間（２期４週間）にe-learningを使用した発音トレーニングの機会を受講生に提供した。この発音トレーニングの機会は受講生全員に提供はするが、どのように活用するかは受講生個人に委ねた。これらのトレーニングは授業内に行うのではなく、各自が課外に時間を確保し行うものとした。

e-learning課題については、ATR CALL Brix 4.0（ⓒ2013 ATR Learning Technology Corporation）を利用した。本調査のために発音に特化した項目を10回分抽出し、それを課題とした。第１期では単語の発音練習、第２期では短文の音読練習に焦点を当てた。一回分の練習量として単語は10語前後、短文は８文～10文で、目安として30分程度で終えられるものとした。教職課程履修生にとって、英語音声学やPronunciation Skillsといった選択科目において、授業内の課題として発音を練習する機会はあったが、個人で自主的に発音練習に取り組む機会はなかった。翌年に教育実習を控え、学習動機が高まった３年次生に、ATR CALLのプログラムを導入することで自主的な発音練習の機会を提供することが可能になり、今回の調査における条件が整った。ATRCALL Brixには、他にも多くの学習プログラムを備えており、それらにアクセスすることは可能であったが、受講生にはあえて他の学習教材に挑戦するようには指導せず、自主的発音練習に取り組むことで受講生自らの学習機会の自発的利用を期待した。図１はトレーニングの流れをまとめたものである。

図１　研究のフレームワーク

【調査１】

第１期および第２期における２週間のトレーニング期間中には各自の取り組みについて毎回記録させ、トレーニング終了後、質問10項目（表１）について６件法による質問紙調査を行った。回答には「１：全く当てはまらない」から「６：よく当てはまる」の６段階のLikert Scaleを用い、マークシートを利用した。

【調査２】

第１期および第２期のトレーニング終了後、調査１に続き、記述式質問紙調査（７項目の内１項目のみ選択式）を行った。第１期に関しては、①これまでの発音練習について（選択式）、②理想的な発音練習について、③発音練習での心掛けについて、第２期に関しては、④第１期と第２期の間での発音練習について、⑤２回目の発音練習終了後の感想、⑥トレーニングの良かった点について、⑦今後の自らの発音練習への取り組みについての７項目について尋ねた。

表１

Q１	やってよかったと思う	Q６	発音がうまくなると自分自身にも自信がついたように感じる
Q２	トレーニングにより自分の発音が上達したと思う	Q７	自主的に学習する習慣がついたように感じる
Q３	自分の発音に自信がもてるようになったと感じる	Q８	ATR CALL Brix は使いやすかった
Q４	発音のコツがつかめたように感じる	Q９	練習時間を十分に取ることができた
Q５	自分の弱点がわかったように感じる	Q10	ATR の他のプログラムも利用してみた

4. 調査結果

【調査１】

第１期および第２期のトレーニング終了後に実施した６件法の質問紙に対する回答を肯定的回答と否定的回答に分けて集計した（図２および図３）。黒のバーは第１期（７月）、灰色のバーは第２期（９月）を表し、各質問項目に対して「６：よく当てはまる」「５：当てはまる」「４：やや当てはまる」に回答したものを「肯定的回答」、「１：全くあてはまらない」「２：当てはまらない」「３：あまり当てはまらない」に回答したものを「否定的回答」とした。図２は肯定的回答の視点で、図３は否定的回答の視点でまとめたものである。

10問の質問において、受講生の70％以上が肯定的に回答したのは、Ｑ１（やってよかったと思う）、Ｑ２（トレーニングにより自分の発音が上達したと思う）、Ｑ４（発音のコツがつかめたように感じる）、Ｑ５（自分の弱点がわかったように感じる）、Ｑ６（発音がうまくなると、自信がついたように感じる）の５項目であった。特にＱ１およびＱ５では80％以上の受講生が、またＱ６では75％以上の受講生が第１期、第２期とも肯定的回答をしており、英語学習において受講生が発音の練習機会を強く求めていること（Ｑ１の結果）、トレーニングをすることで発音における弱点を明確にすることができたこと（Ｑ５の結果）、トレーニングを行うことで発音がうまくなったと感じ自信につなげていること（Ｑ６の結果）、の３点が明らかになった。また、70％近くの受講生がトレーニングにより発音が上達したように感じ（Ｑ２の結果）、60％の受講生が発音の際のコツをつかんだと感じている（Ｑ４の結果）ものの、65％の受講生が自分の発音に自信が持てるようになったと感じるまでには至っていない（Ｑ３の結果）こともわかった。練習をすることにおいては、ATR CALL Brix を利用することへの問題は特になく（Ｑ８の結果）、課題として与えられた発音練習を行うための時間は確保することができた（Ｑ９の結果）ようである。しかしながら、ATR CALL Brix には課題以外の英語学習教材が豊富に用意されているが、これを機に英語学習を自主的に行ってみようという姿勢はほとんど見受けられない（Q10の結果）ことが明らかとなった。

【調査２】

次に、調査１に続いて実施した記述式質問紙（１項目のみ選択式）の回答について多数を占めたコメントをまとめた。一人が多くの点を指摘している場合はそれぞれの項目に１回ずつカ

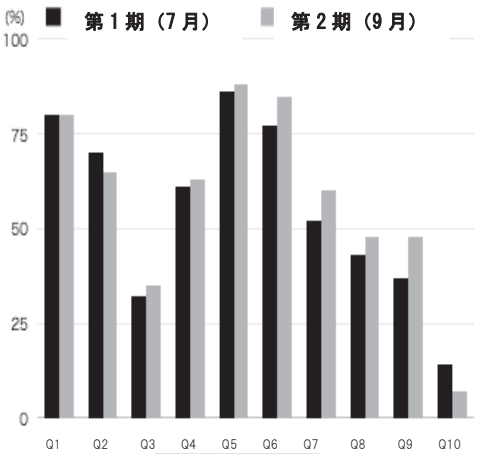

図２　肯定的回答

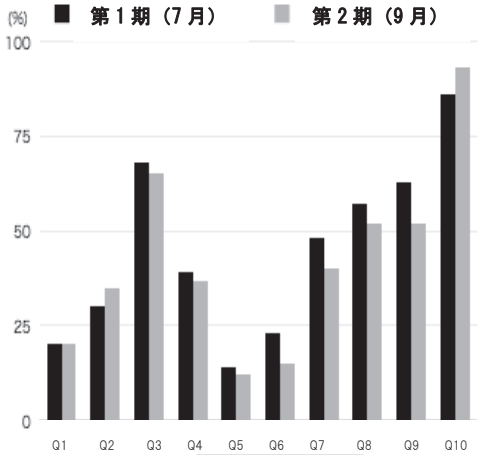

図３　否定的回答

ウントしており、カッコ内の数字は回答者による複数回答の数を表している。受講生は第１期終了後では、①発音練習はこれまで「自己流（22)」で、「モデル音声を聞きながら（28)」、「発音記号を読んで（18)」練習していたと回答し、②理想的な発音練習は「モデル音声を聞きひたすら練習（６)」することだと考え、③発音練習で心掛けていることについては、「モデル音声に近づける（６)」ことと「発音記号を意識する（８)」ことであると回答している。第２期終了後の調査では、④第１期と第２期のトレーニングの間に、何らかの発音練習を行ったかという問いに対して、「しなかった（21)」という回答が半数を占めた。この第１期と第２期の間には約二カ月の夏期休暇があったが、発音練習が重要だと理解し与えられた課題は行うものの、課題を通して学んだ方法で継続的かつ自主的な練習につなげる努力を半数の受講生はしていないことがわかった。また、⑤第２期のトレーニングを終えた感想を尋ねると、単語の発音練習より文の読み方の練習をする方が「自分の弱点が明確になった」、「文の読み方のコツがわかった」、「英語特有のリズムがわかった」気がするという肯定的意見がある一方で、機械（PC）相手の「文の発音練習は難しい」という指摘も多くみられた。PC 環境が整わず自宅で練習できない受講生は大学の CALL 教室で課題を行うことを強いられ、他の学生が CALL 教室にいる場合は、なかなか声を出して発音練習する勇気はでないようである。また、声の質により機械で評価・判定されにくい場合もあり、明らかに間違った発音であるにも関わらず録音の声が大きかっただけで高い評価を得たケースも報告された。一方で、⑥トレーニングの良かったところとして「納得いくまでモデル発音を聞き発音練習できた（12)」こと、「評価してもらえる（10)」こと、「自分の発音を録音できる（9)」ことなど、ATR を使用したことを肯定的に評価している部分がある。⑦今後、発音のスキルアップにどのように取り組もうと思うかということについては「発音記号を意識した母・子音の練習（9)」を「機会を見つけて発音練習につなげていく（6)」ことであると、次年時に教育実習を控えた受講生は目標を掲げた。

5. 考察とまとめ

本研究の目的は、自主的発音練習の機会を与えられたことに対する英語科教職課程履修生の取り組み方を調査し、練習中に履修生自らが気づく問題点について考察することであった。調査１および調査２の結果より、受講生は ATR を用いたトレーニングを通して、これまでの個人の発音練習においてできていなかったことが、実現できていることを認識した。そのポイントは、1）何ができていて、何ができていないのか自分の発音の強みと弱点についてメタ認知（Oxford, 2011）できたことと、2）英語の強勢拍リズムによる発音のコツが部分的に分かったことの２点であった。これは、コンピュータを相手に練習をすることで、周囲に気兼ねすることなく何度も繰り返し、納得するまで練習できた成果であると考えられる（DeKeyser, 2007)。

一方、自主学習（ATR-CALL）だけでは不十分であることも明らかになった。多くの受講生がこのプロジェクトに参加して良かったと思っているものの、自分の発音に「自信が持てるレベルにまでは到達していない」と回答している。これは発音や音読はできるものの、自分の発音が正しいのか、また、文の読み方が適切であるかどうかの判断が自分ではできないためである。受講生が受け止めている「満足いくまでの練習はできた」が、「納得する発音のレベルに至ったと感じていない」という事実は、英語科教職課程履修生の取り組むべき新たな課題を明確にしたといえよう。

今回の調査を通して得た今後の課題は３点である。第一に、ATR-CALL における採点・評価上の問題点の整理である。例えば、比較的容易な例としては/ｓ/と/ʃ/の区別、比較的困難な例としては dark L（舌先を歯茎に向け上げ

る/ｌ/）における舌先の緊張度合や日本語にはない英語の摩擦音/ｆ/や/ｖ/，/θ/や/ð/の摩擦の度合などが挙げられるが、どの音素の発音がATR-CALLで容易に評価され、また評価が困難なのか，一概に「発音」と一括りにすることはできない。

第二に、CALL教材を使った自律的学習では不可能な部分・行き届かない部分を教員がいかに指導し補うか、指導上の工夫が必要であるという点である。個人学習では解決しない項目については、自らの課題となる発音や読み方をリストアップさせ、その項目について教員が理論的及び実践的知見を踏まえて直接的にサポートすることが必要であろう。また、受講生同士でお互いに教え合い、ピア評価することも学習者と指導者という立場での経験を積むことにつながる。実習生といえども、翌年には「教師」という立場で生徒の発音を評価し苦手な発音の指導が求められる状況におかれることを考えれば、そのための練習の機会として協働学習を有効利用すべきである。

自分自身の中に理論的また実践的な「ぶれない発音の軸」を持つことを求められるのが教育実習であり、教職履修生が発音のモデルを示す初めての「公の場」となる。教職課程履修を通し、実習生は人前で発音することや音読すること、模擬授業を行うことを経験する。今後、実習生に自信をつけさせていくための指導とサポートを教職担当教員がいかに行うかが、第三の課題である。今回の取り組みは、参加者の選択の余地はあるものの、課外の発音練習実施自体に関してはほぼ強制的な形式を取った。自律性とは完全に学習者に任せきることではない（Wenden，1991）。どこまでを学習者の自発性に任せ、どの程度教員からの介入をすべきなのか、三つの課題を探求するなかでこの自律と介入という大きな問題に関しても今後検討を重ねてゆきたい。

注

1）本研究は平成24～26年度科学研究費補助金、基盤研究（C）（課題番号24520671）の助成を得て行われたものである。
2）本稿は2016年８月20日に獨協大学で行われた全国英語教育学会第42回埼玉研究大会において報告した研究発表を加筆修正したものである。

引用・参考文献

DeKeyser, Robert M.（2007）. Introduction: Situating the concept of practice. In R. M. DeKeyser (Ed.), *Practice in a second language: Perspectives from applied linguistics and cognitive psychology*（pp. 1-18）. New York: Cambridge University Press.

JACET教育問題研究会（2006）.「英語科教育実習の実態と今後の教職課程の課題」『英語科教職課程における英語教授力の養成に関する実証的研究』1-40.

河内山真理・有本純・中西のりこ（2013）.「教職課程における英語発音指導の位置付け」Language Education & Technology, 50, 119-130.

Oxford, Rebecca L.（2011）. *Teaching and researching language learning strategies. Harlow*, UK: Pearson Education Limited.

Wenden, Anita.（1991）. *Learner strategies for learner autonomy*. Hertfordshire: Prentice-Hall.

山本誠子（2016）.「英語音声学（教職科目）における発音指導力の養成－学生自身の発音能力の分析－」『教育開発センタージャーナル』第7号，35-43.

Zimmerman, Barry J., & Schunk, Dale H. (Eds.).（2009）. *Motivation and self-regulated learning: Theory, research, and applications* (second ed.). New York: Routledge.